〈編集後記〉

土倉九三氏の死を悼む

維持会員の拡大や会報の印刷等，関西自然保護機構の発展に長年ご尽力下さいました株式会社土倉事務所社長，土倉九三氏は1996年６月12日不帰の人となられました。氏の御霊に謹んで哀悼の意を表します。

土倉氏は奈良県の大山林地主，土倉家の嗣子として1921年に生を得られた。京都第一中学校から京都高等蚕糸学校（京都工芸繊維大学）を経て，1942年には故今西錦司先生を隊長とする大興安嶺探検に参加された。以後，京都大学学士山岳会会員として登山の発展に貢献されると共に，株式会社新美印刷改め土倉事務所社長として，学術雑誌の編集印刷，学会事務管理等の活動を通じて，学術の発展に大きな足跡を残された。

“氏”や“先生”ではなく，親しみを表す“さん”の言葉を敢えて使わせて頂くことにするが，土倉さんは６尺の偉丈夫であった。土倉さんは純粋な人であった。土倉さんはいつも若々しく勇ましかった。土倉さんは世俗の名誉や権威を嫌い，これを浅薄にひけらかす者には真っ向から抵抗した。土倉さんを狷介孤高と誤解する人もいたが，みんな土倉さんが好きだった。私もそんな土倉さんのファンの一人だった。

土倉さんには本当に親切にして頂いた。これまでにお会いできた機会はそれほど多くはなかったかも知れないが，お会いする度に暖かい励ましを頂いた。遅蒔きながらやっとのことでしたためた学位論文の印刷にはじまり，不慣れで戸惑うことの多かった日本生態学会和文誌編集幹事役を何とか任期満了できたこと等，全て土倉さんのご支援の賜だった。土倉さんは多くの若者を支援した，彼らが謙虚さと真摯さに留まっていた限りは。

思えば1996年３月16日が土倉さんとお会いできた最後の日となった。自分の居心地の良い状況を急拵えせんとばかりに，さくらの蕾に強い陽射しを照りつけ，訪れの遅かった春が慌てて自己主張を展開する土曜日の午後だった。土倉さんからご紹介頂いた本機構維持会員クラレ社への訪問の顛末をご報告するため，事務局の長島さんとご自宅を訪問したのである。土倉さんは病のため自宅療養中とのことであったが，私どもを大歓待して下さった。長時間お話をお伺いした。話題は青春時代の中国，後年の中国との再会，登山と探検，今西学派，私の恩師四手井・吉良両先生と土倉さんとの楽しかった交流の思い出，猫のこと，犬のこと，人生と理想的なお葬式のこと等々，尽きることはなかった。お体を心配しながらも，つい長居となり，土倉さん宅を辞したのは夕方となってしまった。帰り道，土倉さんの体に無理をさせてしまったことを反省した。また，お伺いした話を会報に書いて頂けないだろうかと考えたりした。

土倉さんのご様態が急変されたことを知ったのは，６月初旬だった。会報への原稿をお願いするため，土倉事務所へ電話をしたのである。その後，土倉さんの永眠された事を知った。私は，土倉さんのお通夜にもお葬式にも参列しなかった。愚直に理想的なお葬式を実行してしまったことを，今は半ば悔いている。悔は人を成長させ，人間の行動規範として重要であるが故に，長時間人の心に留まる。土倉さんも私の思いの中に留まる（山倉拓夫）。